

学校名： 横浜市立飯田北小学校

担当教科： 3 学年担任

氏名： 土田 航一郎

1. 今回の研修における目的やねらい

- ・カンボジア・ベトナム・タイ・中国・韓国といったアジア各国にルーツを持つ子どもが在籍する在任校において、多国籍の視点を日々持つことは、ごく普通のことである。しかし、実際は日本に在住する子どもたちやその保護者を通して、他国の文化理解をしているのが現状である。その環境の中で、世界の国と自分たちとかかわりのある国とのつながりを意識することと、知ることはとても大切なことと思われる。そのため、実際にアジアの他の国に行き、文化を肌で感じ知ることで、日々の学校活動に生かしていこうと思い、本研修に参加した。
- ・本やインターネットの知識だけではなく、カンボジアの子どもたちと日本の子どもたちの教育や社会環境の違い、また同じ部分について実体験を通して、学んでこようと思った。そして、より世界に対して広い視点を持つきっかけを持ちたいと思った。また、文化や国の違いを理解したうえで、いろいろな国の人たちを互いにわかり合えるような自然な意識、相手の国の文化や言葉、考え方の違いを知ったうえで、根底には同じ思いもあることを、本研修を通して学び、児童や保護者に伝えていきたいと考えた。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

- ・カンボジアの方々、そしてカンボジアでがんばっている日本人の方々とはふれ合い、意見交換をし、また時には同じ体験を通して、多くの生き方や考え方を知ることができた。その点、100%以上の成果を得ることができたと思う。また、現地で働く日本人の方と話す機会を通し、日本人から見たカンボジアへの視点、カンボジアの人たちの思いについて、深く知ることができた。カンボジアに行き、カンボジアについて知ることと共に、カンボジアを通して日本のことも考えられたことも成果の一つである。教師であると同時に、自分が人間として成長させられた研修だったと思う。この研修の成果は、今年度行う授業のみならず、今後もずっと発揮出来ていくものと思われる。

3. カンボジア国から学んだこと

- ・内戦の歴史や不発弾処理、貧困問題、教育問題など、まだまだ問題が多いのも事実だが、それ以上に人々の明るさやエネルギー、優しさを一身に受けた。自分自身、教育者としても、人間としても、たくさんのことを吸収することができた。
- ・言葉の壁はあっても、真摯な態度で接することで自分の思いは相手に伝わり、言葉が通じなくても心の交流は可能な事について、身をもって知ることができた。また、国は変われども人々の思いは同じであること。平和や豊かさに対する思いや願い、笑顔などは万国共通のものであることを改めて感じる事ができた。

自分が一番思い出深いのは、IKTT「クメール織物研究所 伝統の森」での一夜である。日本から来た自分たちを歓迎しようと、村人たちが夜にダンス大会を企画してくださった。音楽がスピーカーで流れる中、言葉は一切通じない村人たちの中で、子ども達とは追いかかけ合ったり、つつき合ったりして楽しみ、大人たちとは一緒に1時間半くらい踊った。言葉の壁を崩すものとしてそ

ここに存在していたのは、「互いを受け入れる気持ち」と「笑顔」だったと思う。

一夜明け、前日に楽しい時間を過ごした人たちとの間に、何か言葉に表現できないような暖かい空気と気持ちがあることを実感した。この感覚の獲得こそが、今回のような機会がなければ得られないものだったと思う。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

- ・まずは国際理解教育に大いに生かそうと思う。いかに自分がイメージで他の国をとらえていたかということを知ることができた。恥ずかしながら自分は、カンボジアでいうと「地雷」「貧困」といったイメージを強く持っていたが、今回の研修を通し、それだけではないことをよく知ることができた。まずはカンボジアについて、特に良さについてたくさん子ども達に伝えていこうと思う。
- ・援助の先に何があるか、そして自分たちができる国際貢献とは一体どういうことか子ども達に学ばせていきたいと思う。今年度は、3年生を担当しているが、今後高学年を担当した場合、特に実践活用していこうと思う。
- ・総合学習で、「かいこと町と私たち」をテーマに学習を進めているが、日本とカンボジアの文化の比較から世界を考えさせるような授業展開をしていこうと思っている。今回、本研修に参加することを児童に伝えたところ、「夏休み中に帰国した中国やベトナムで自分もいろいろ調べてきたい。」といった児童からの発言がみられた。こういった子どもたちの関心を切り口に、今回の研修成果を生かし、さらにカンボジアやアジア各国の国の理解につなげていこうと思う。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

- ・現地で学ぶ場面は、研修中のどの場面、時間でもあった。訪問先での出会いや体験、移動中の会話、ホテルでの思いがけない協力隊員との出会いなど、とても有意義で中身の濃い研修だった。現地のスタッフの方も良い方たちばかりで、非常に良かった。特に、メンバーや通訳さんとの会話から、いろいろ考えることができて良かった。
- ・授業をある程度イメージしていったが、どんな教材を現地で手に入れられるか、どう活用したいかを事前にもっと考えておくべきだったと思う。また小・中・高とそれぞれ分かれて行ったカンボジア日本友好学園での交流会では、通訳さん不在で戸惑った場面があった。英語の話せる子どもも少なかったため、事前に言葉を介さない展開をもう少し意識しておけば良かった。
- ・事前研修の中で、自分はどこの部分をどういう方法で研究したいかなど、メンバー同士で話し合う機会をもう少し持っても良いかと思った。また、現地での移動に関しては、なるべく全員で移動できるような交通手段だとなお良かったと思う。

6. その他研修全般を通じての感想・意見など

- ・JICAの全面的なバックアップがあったことで、安全で内容の濃い研修を行うことができたのだと思う。個人ではなかなか行けないところでの体験をすることができたのは非常に有意義だった。
- ・通訳さんがきめ細やかに対応してくださり、現地の方との意思疎通は基本的に問題なく行うことができた。本当に良い方で助かった。通訳さんから伺った話からも、カンボジアの実情についてたくさん学ぶことができた。
- ・今回の研修は、カンボジアの文化や国の実情、社会背景や問題、それに良いところを学ぶのと同時に、人の生き方や考え方を学んだ研修でもあった。カンボジアに来ていながら、そこに暮らす人たちの考え方に共感し、自分と比べ、その生き方に思いを巡らせている自分がいた。魅力的な

人たちと出会えたこと、つながりが持てたこともこの研修の大きな収穫の一つだった。

I K T Tの森本さんからいただいた「口を開けて待っているような人を作ってはいけない。」という言葉や、「見た人が買わずにはいられない布を作れと言っている。」という言葉から、教師としての自分は、

「出会った人が引きつけられずにはいられない、魅力ある人を育てていかなければいけない。」と強く思った。

- ・あらためて、自分の力についても気づくことができた。
人は本来、上辺だけの言葉や態度を見抜く力が強いものである。言葉が通じなくても真摯に接することで相手は心を開いてくれることに気付かされた。信頼感を得るためには、まずは相手を尊重する気持ちと真摯な態度が大切なことが分かった。
また、「笑顔」は万国共通であることにも気付かされた。
自分にとって、「笑顔」は人との関わりの中で重要なキーワードだが、コミュニケーションをとる中で、それは違う国でも通用することが分かったと同時に、これからも大事にしていこうと思った。
教師として今後何を伝えていけるのかについては、帰国後じっくりと考えていこうと思う。
今回の研修は、カンボジアから学び、それを開発教育として授業に生かすことが目標だが、自分にとっては授業がゴールではなくなった。
今回学んだたくさんのことを、人間としての自分の今後にも生かしていこうと思う。

7. 今後の本研修参加者へのアドバイス等

- ・やはり体調管理が一番大事だと痛感した。普段からあまり胃腸が強くない人は、ちょっとした氷や生野菜にも気を配った方が賢明だと思う。自分も気をつけていたが、3日目の午前中に腹痛を起こしてしまった。また、蚊の対策も重要。日本から対策グッズを持っていった方がよい。
- ・荷物は、軽めのバックに入れ、大きな町のホテルでランドリーサービスを当てにして、衣類も乾きやすいものを必要分だけ持参するのが良い。自分はハードタイプのスーツケースに入れて持って行ったが、ケース自体7.5キログラムもあり、空港での荷物預け時等、他のメンバーに迷惑をかけてしまう結果となった。
- ・事前に訪問先について、下調べをしておくのが良い。「カンボジア日本友好学園」のコンボーン氏とIKTT「クメール織物研究所 伝統の森」の森本氏の著書を事前に読んだことが、非常に役に立った。
- ・実際に生かせるかどうかは、現地に行ってみないと分からないこともあるが、日本の文化や学校の生の様子を伝えられるものを用意していった方がいいと思う。写真や子どもの絵、映像など。自分は言葉が分からなくても一目瞭然のものとして、日本でビデオ撮影した映像をiPadに入れて持って行った。もちろん、その場の状況やスケジュール、他のメンバーとの調整の結果、用意した質問用紙や紹介したい映像媒体などが活用できないまま終わることもあるため、その点は念頭に入れておく必要がある。
- ・学ぶ機会は、訪問先に限らない。「どこでもどんなことでも、吸収してやるぞ!」という心意気と相手を尊重する意識を持って、ぜひ積極的に参加してほしいと思う。